
SOLUTION

桜木 白兔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SOLUTION

【Nコード】

N7791A

【作者名】

桜木 白兔

【あらすじ】

護るために全てを捧げ、取り戻す為に命を削る。あなたは大切なもののために何かを差し出せますか？犠牲無くしては得られない。それでも尚求めるものがあなたにはありますか？

prologue in my heart

目を開くとそこは果てしなく広がる砂漠だった。見えるものといえば熱気で揺らぐ砂と雲一つない空のみである。

その中心に僕はいた。Tシャツとジーンズ姿の僕の小さな手には身の丈近くある剣が握られていた。持ち物といえばそれだけだった。

僕、何してたんだっけ？

そう思い耽っていると、足元から白く輝く靄が現れた。靄は僕の前でなにやら姿を変えていく。すると靄は白く輝くヒトガタになった。

なぜか僕にはこの靄がとても愛おしく思えた。愛らしいその靄に触れようと僕が手を伸ばすと靄に口が現れ、靄はにっこりと微笑んだ。その笑顔が、なぜか切なく思えた。僕はたまらなくなって、思い切つて靄に手を伸ばした。

なんでだろう。なぜか僕にはこの靄がとても大切なものに思えて、なぜかこの靄が消えて失くなってしまふような気になった。

その考え通り、僕の手が靄に触れる瞬間、靄の周りの足元から錆混じりの鉄の壁が現れた。鉄の壁は天まで届くほどに高く伸びていった。

いまや僕と靄は完全に隔離されてしまった。僕の目に写るのはもうこの鉄の壁だけだった。

心の奥から込み上げてくる【悲しみ】という感情に任せて僕は剣を振るつた。甲高く鳴る、金属同士の接触音に伴って僕の小さな体が痺れた。

鉄の壁にはうっすらと傷が付いただけだった。僕は剣を握り直すとがむしゃらに壁を斬りつけた。火花と金属音が絶え間なく巻き起こる。

開け！開けよ！なんで邪魔するんだよ！

奥歯を噛み締め、ひたすら剣を振っていると涙が滲んできた。泣きじやくりながらひたすら剣をふる。手の皮が剥けて血が滲んだ。だが痛みは感じなかった。絶え間なく飛び散る火花に髪は焦げ、顔は煤けた。

ああ。思い出した。僕がここにいた意味を。僕はかけがえないものを取り戻したかったんだ。

だからこの剣を。力を手に入れたんだ。大切なものを取り戻すために。この砂漠は僕自身だ。力と引き換えに全てを失った僕自身の虚像だ。力を求め過ぎた僕には、愛したものの姿はおるか名前さえも忘れてたいた。

虚無と絶望の中、僕はただ剣を振る。愛したものを探し求めるために、僕自身の証明のために。

第1話（awakening）

ほの暗い病室のような部屋の真ん中で僕は目を覚ました。

頭がぼーっとする。まだ夢から覚めてない感じだ。起き上がろうとしたが動けない。どうやら首や手足に枷が着けられてるらしい。冷たい金属の感触がする。

状況が飲み込めずに混乱してる僕に部屋の隅にでもいたのか、白衣を纏った人が4、5人寄り添ってきた。

「おはよう。気分はどうかね？どうやら自分がどのような状況に在るのか理解出来ないようだな。ここはとある実験施設でね。様々な人体実験を行っている。君は近くの山で倒れているところを拾われてね。瀕死の重傷だったのだよ。

早急にここへ運び込まれたのだが、何しろ怪我が酷くてね。正直、手遅れだったよ」

一人の白髪の科学者が苦々しげに顔をしかめながら語った。

「僕はどうなったんですか……？」

状況が十分に把握できない今、自分と置かれている立場が知りたかった。

白髪の男は再び口を開いた。

「さつきも言った通り、君は手遅れの重傷で我々では君を生かすのは不可能だった。そこでこの石の使用を試みた訳だ」

そう言うつと懐から拳程の深紅の結晶を取り出した。

「これはこの数年間に発見されたばかりの石でね。一種のエネルギーの結晶体なのだよ。扱い方によって電力や火力はもちろん風力や原子力にも使える。全く素晴らしいとは思わんかね？

さらにこの石は意思を持つようですね。心電図で見ると熱や寒さへの反応も石によって違う。

実はこの石を君の体内に移植したところ、一日足らずで怪我が完治したのだよ。どうかね？体に異常は感じられかね？」

いかにも興味津々といった表情で男は訪ねた。身体を拘束される以外に身体に異常は診られない。ただ男の話がイマイチ信用できない。

今の自分が石によって生かされてる？正直馬鹿げた話だが何も情報のない今、その話を信じる他なかった。

それから幾月か経っただろうか。結局半信半疑で日常を過ごした今、回りの人たちの様子を見る以上、あながち嘘ではないようだ。僕と同じような被験者は無数にいて、僕は今彼等と共に過ごしている。

彼等も何らかの理由により石を移植されたく、よく情報を頂いている。

どうやら石が不思議な効力を持っているのは間違いないらしく、ここにいる人たちは力を求めたり、何らかの理由により来ざるを選なかったらしい。

そして、こここの科学者たちの目的は被験者たちによる兵の設立らしく、石の移植を受けた僕としてその目的のための実験体に過ぎなかった。

第2話〈escape〉

あれから幾月経っただろうか。この暗い地下施設だと昼夜の堺もいまいちハッキリしない。ただひたすら闘いだけを身体に教え込まれた。人体の急所、心理の駆け引き、そして力の使い方・・・

どうやら身体に石を埋め込まれた人間は何らかの能力が備わるようだ。だがそんな知識も僕には興味がなかった。

生まれながらにして強大過ぎる力以外持たない僕にとって闘いのみが自己の証明だった。来る日も来る日も血だけが流れていく。もうどれだけの人を殺めただろうか。流れた血の分だけ僕の感情も薄らいでいった・・・

そして殺生という言葉のみが僕に残ったある日、事件は起きた。

静まりかえった真夜中の静寂。窓すらないこの部屋の中で目に留まるものは何もなく、己の心音のみが意識に入ってくる。静寂の中を波打つ一定のリズムは耳をつんざく一発の爆音に掻き消された。眠りに就こうとした意識が無理矢理に引き戻される。

「緊急事態発生！緊急事態発生！エリア7にて脱走者出現！人数の詳細は不明！至急各エリアの警備員は脱走者の駆逐に務めよ！生死は問わず！繰り返し・・・」

警報が鳴り響き、警備員達の怒号があちこちで起きる。どうやら

脱走者が出たらしい。こういう類いの施設だとよくあることだ。

無駄な事を

そう吐き捨てて布団に潜った。

仮にこの施設から脱出できたとしてもそう易々と安息は手に入りはしない。絶え間なく追っ手の影に脅えることになる。ましてや軍司施設である。そう簡単に逃げ切れはしない。賞金なりなんなりを餌にして世間を味方に就けて血眼になって捜すだろう。どのみち自分には関係のない事……とも言えなくなつた。突然部屋のドアが吹き飛ばされ、彼の頭上を掠めた。

振り向きもせずに硝煙の向こうに問い掛けた。「誰？何か用？」
いかにも興味がないといったように最低限の質問をした。ところがドアの向こうの主はズバズカと部屋に押し入り彼を肩に担ぎ上げた。本当になにもかもいきなりだ。

「何するのさ。僕まで巻き込まないでよ」

そう言いつつも何の抵抗もしなかつた。彼を担いだ、肉付きの良い男が答えた。

「寝ているところをすまん。まあ察する通り俺は脱獄者だ。ここを抜け出すのは問題ないんだがその後の追っ手を振り切るのに少々人手不足でね。悪いが手伝ってもらいたい」

そうさらっと答える間にも男は片手の銃で十人近くの警備員を撃ち沈めていった。

「やだよ。なんで僕まで巻き込むのさ。死ぬなら勝手に死んでよ。こんなくだらない事で僕は死にたくないよ」

そう断りながらも一向に抵抗する様子を見せない少年。

「まあそう言つな。お前の腕を買って出てるんだ。それに損はさせないぜ？今手元にお前の事が記された書類がある。身体記録からお前の回収場所、収容以前のお前の情報の記された書類だ」ピタリと少年の動きが止まる。

僕の記録？

自分の名前さえ知らない少年にはこれ以上魅力のあるものはなかった。感情を失った彼に希望という言葉が生まれた。今まで闘う事によつてのみ自分を理解してきた。しかし本当の【己】の手掛かりが目の前にある今、何を躊躇う必要があるだろうか。

少年の沈黙を察した男は最後の扉を撃ち破った。

「契約成立の様だな！悪いが早速働いてもらうぜ！」

そう言つて彼を降ろすと短剣を二振り渡した。「闘えるな！？この先の林まで死ぬ気で走れ！奥で仲間がジープを留めてある。そこに俺の仲間がいるからそいつらと合流して逃げろ！俺はもう一カ所の方から逃げる！いいな？！必ず生き残れ！」　そう言つと男は書類を渡して走りだした。その場に残された彼は書類を懐に収めて短剣を握った。こういう武器の扱いには慣れてる。

彼は走り出した。頭上を飛び交うガンシップに目もくれずに。ただひたすら前だけを見て。たった一人の希望を抱いて。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7791a/>

SOLUTION

2010年10月17日10時45分発行